

旧海軍司令部壕と病院壕・病室壕について

—教材 田宮虎彦作「沖繩の手記から」の舞台を探る—



◀旧海軍司令部壕医療室

智辯学園奈良カレッジ中学部・高等部

下仲一功

田宮虎彦作「沖繩の手記から」は、長く国語の教材として使われてきた作品の一つである*1。作品が単行本として刊行されたのが一九七二年（昭和47年）、教材本文としては、後に手が入れられた『新潮現代文学22』（一九八〇年（昭和55年））所収のものをを使うのが普通であるようだ。だが、その初出は一九五二年（昭和27年）十二月までさかのぼり、田宮氏の作品完成までは、実に二十年の時を待たねばならなかった。それは、推敲に時間をかけたというより、むしろ小分けに発表していた作品を一つにまとめる際に、掲載誌が休刊になったことが原因である*2。しかし再度発表する機会を得るまでに、田宮氏は沖繩を訪れ、新たに公にされた戦記等の資料に目を通すなど、取材を重ねることで、作品の構想を練り直した。一九七一年（昭和46年）七月から同人誌『密林』に連載された同作品は、特に第一章から第三章までの内容が大きく書き加えられ、教材の中心部分となっている第四章および、それ以後の章も、大筋は変わらないものの、細かいところは随分手が入られている*3。

「沖繩の手記から」という作品は、「から」という語が示すように、田宮氏のオリジナルではない。『密林』誌2号（一九七一年（昭和46年）七月）に掲載された『沖繩の手記から』については、作品の素材は元海軍軍医大尉K氏が綴った「原稿用紙六十枚ほどの手記」であることや、氏の了解を得てそれを作品化したことが

記されている。K氏の手記は公開されていないが、田宮氏はそれに大きく手を加えた結果、K氏に迷惑のかかるのを恐れ、「この作品はルポルタージュとしての戦記ではなく、私の創作である。」と宣言して、改変の「責任の所在をはっきりさせて」いる。実際、登場人物の名前も「K氏の手記に書かれた実名をそのまま記したのは当間キヨさんだけ」（新潮社単行本「あとがき」、一九七二年（昭和47年）十一月）と記しており、初出以降、名前が変わった登場人物も多い。

このように修正が加えられたものの一つに、教材の舞台となっている、海軍沖繩方面根拠地隊の司令部壕と病室壕の位置関係がある。作品では、語り手の「私」が、夜、自分の所属する巖部隊の司令部から沖繩南部へ撤退する際に、豪雨の中、部下とともにこの司令部壕にたどりつくことになっている。この根拠地隊司令部壕は豊見城市とみぎすく豊見城あざに現存していて、「旧海軍司令部壕」として一般財団法人沖繩観光コンベンションビューローの管理の下で公開されている。その周辺も海軍壕公園として整備された。

現行本文では、「そこは海軍部隊の司令部のあった沖繩方面根拠地隊の壕であった。（中略）私たちは根拠地隊医務科の治療所になっていたところを探し出し、そこに私たちはひとかたまりになって横になった。疲れがたちまち私たちを眠りにひきずりこんで行った。」（『新潮現代文学22』）となっているが、その部分の初出、

「女の顔」(一九五二年(昭和27年)十二月)本文では「かうして私たちは、敗走第一夜を、沖繩根拠地隊——沖根の病室に送った。病室——たしかに病室には違ひないが勿論、私たちが前夜までゐた海軍部隊本部の病室と同じやうに、壕の中である。(中略)散乱したベッドや、薬品棚が、明け方近くなつてやつと、おぼろげに見えるやうになつた私の眼にうつるやうになつた。」となつてゐる。

現在、旧海軍司令部壕は、丘の上にあるピジターセンターから、階段を下りて入るようになってゐるが、本来、壕には複数の出入口があり、普段は非常口として閉鎖されている北西側の出入口から入つて南東方向へ、三つの発電室跡を経た少し奥の部分が医療室だつたと推定されている*。しかしそこは極めて狭い空間であり、薬品棚はともかく、初出本文に書かれたような、散乱するほどのベッドがあつたとは思えない。壕の正式な公開は一九七〇年(昭和45年)だが、すでに壕内では一九五三年・五八年(昭和28年・33年)に二千三百余体の遺骨収集が終了しており*5、田宮氏が沖繩を訪問した一九六〇年(昭和35年)には、遺構の様子も明らかになりつつあつた*6。初出本文の「病室」から、現行本文「治療所」になつてゐるところへの書き換えは、そのような状況を反映してのものと思われる。また、当間キヨさんが一人残つて重傷者を看護してゐた病室壕、それから「私」と一緒に纏

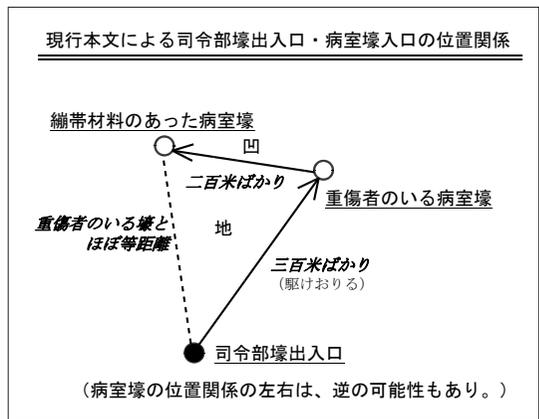
帯材料を探したもう一つの病室壕も、初出本文と現行本文では位置が異なつてゐる。キヨさんが「私」を司令部壕「治療所」から病室壕へと導く部分、また、「絆帯材料」を探しに行く部分は、現行本文では、

・暗い壕の奥から出た私の眼には壕の外は真白い光につつまれてゐるやうに明るく、その眼が明るさに馴れた時、娘は山肌濡れて光る青い草の中をいっさんに駆けおどり行つてゐた。三百米ばかりはなれたところに小さな壕の口があいており、娘はそこで私を待った。私が追いつくと、娘は、「ここです」と言つたが、私は、その時、もうその壕の奥から流れ出て来ている生まぐさい血膿の臭いに氣づいてゐた。

・「あるだろうと思ひます」と娘は言つて、／「もうひとつ病室壕があります、そこへ行つてみます」と言つた。／「どこだ」／「むかいの山です、そこからもこの人たちはここへ連れてこられました」／娘はそう言つと、また壕の外に出て行つた。私もそのあとを追つて、昨夜、私たちが泥濘の中をたどつて来た凹地をわたり、二百米ばかり駆けて、朝、私が娘と顔をあわした根拠地隊の壕と、負傷者たちが棄て去られてゐる壕と、ほぼ同じ距離でむかいあつた山かげのガジュマルの木立のかけまで走つて行つた。そこに偽装網がまだそのまま残つてゐる壕の口があつた。娘のあ



米軍による海軍司令部壕上空写真 (1945年)
提供 国土地理院

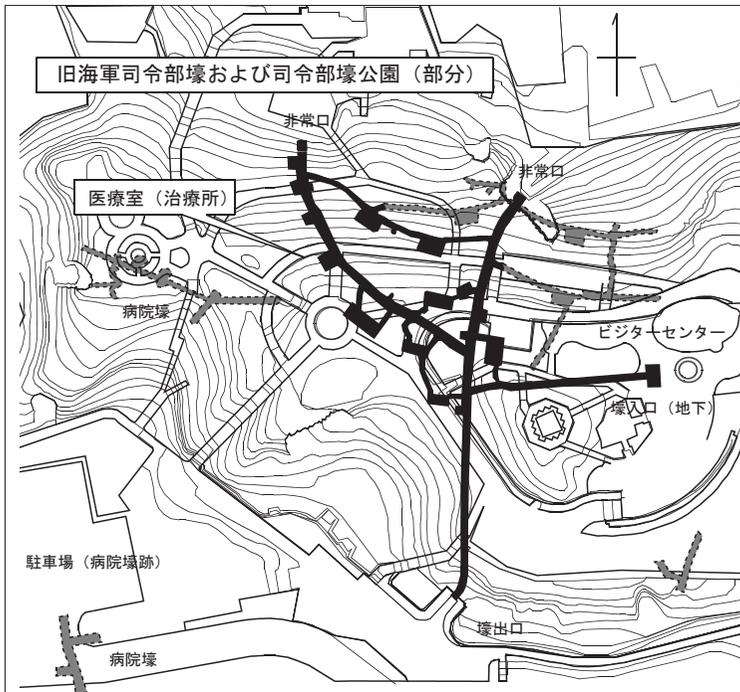


する別の壕の入口が残っていて、それを現行本文に取り入れたのであろうと思われるのである。

ただ、旧司令部壕周辺は昭和四十年代以降に急速に宅地開発が進んだ。元から豊見城の集落があった旧司令部壕東側はもちろん、現在は北側、西側、南側と、旧海軍司令部壕公園のある丘陵ぎりぎりまで住宅が迫っている。当間キヨさんが一人残ったとされる病室壕、あるいは田宮氏が想定したであろう病室壕は、おそらくすでに埋められて住宅群の下になったと思われる。

沖繩では一九九八年（平成10年）より戦争遺跡詳細分布調査が行われ、大部の報告書がまとめられている。しかし、壕に関わるものだけを取りあげても、調査までに消失したもの、今も実態が明らかでないもの、さらには、いまだ知られていないものも数多くあるとされる。現在も各地で遺骨収集が続けられているが、旧司令部壕でも昨年、NPO法人による再調査が進められ、新たな遺骨・遺物が採集されたことは耳新しい。そのニュースを聞くに付けても、沖繩戦下で何が起こっていたのか、私たちはもっと真摯に向き合わねばならないのではないかと、強く思わされた。

なお、本稿の作成にあたっては、旧海軍司令部壕事業所所長・屋良朝治氏のあたたかいご協力を得ました。深く感謝申し上げます。氏からいただいたメールの中の、「戦後77年経った今でも沖繩では戦争が終わっていないのが実情です。」という言葉を深く心に刻んでおきたいと思えます。



旧海軍司令部壕と公園。壕のある丘陵は非常に展望が開けており、西は慶良間諸島、北は首里城、はるか向こうに前田高地などが見渡せる。沖繩がまだ琉球であったころ、中国からの船の接近を知らせるのろし台が設けられており、火番森^{ヒバンムイ}と呼ばれていた。地下に長大な壕が残る。壕の色の濃い部分が公開されている部分、やや薄い色の所は非公開。薄い色の部分から先は、まだ埋もれている部分が残っている可能性がある。図の左寄りに、おそらく独立した二つの壕があった。そのうち南側の壕は削平されて駐車場となったため、規模等不明となっている。現在、壕の資料室に展示されている医療器具は、駐車場造成中に採集されたものである。等高線でわかるように、北側や西側は、ぎりぎりまで住宅地がせまっている。おそらく当間キヨさんが重傷者を看護していた壕は、すでに住宅地に埋もれて消失したと思われる。

*1 「沖繩の手記から」が初めて教材に使われたのは、尚学図書の一九七六年（昭和51年）版教科書であり、以後各社に採用されて現在に至っている。

*2 後に引用する「密林」誌2号に掲載された田宮氏の同人雑記「沖繩の手記から」についてに詳しく書かれている。

*3 拙稿「教材 田宮虎彦『沖繩の手記から』を考える（上）」（奈良県高等学校国語文化会『まほろば』66二〇二三年（令和5年）三月）参照。

*4 負傷者が集まっていたという証言に基づいて、その部分が医療室だと推定されている。

*5・*7 『沖繩旧海軍司令部壕の軌跡』宮里一夫（二ライ社、一九八六年（昭和61年））による。

*6 なお、田宮氏は一九七〇年（昭和45年）にも沖繩を訪問している。

*8 田村洋三『沖繩の島守 内務官僚かく戦えり』（中央公論新社、二〇〇三年（平成15年））、山里和枝さん、上地よし子さんの証言。